

問二 (ア) 2 (イ) 4 (ウ) 4 (エ) 1

【古文の通釈】

白河院の御時世の時、九重の塔の金物を、牛の皮で作ったというわさが流れて、修理した人である、定綱朝臣が、処罰されるらしいという話が広まった。(白河院が) 仏師にながしという者を召し出して、「間違いなく、真偽を見て、正直に申せ」とおっしゃったので、承って、(塔に) 上ったが、その途中ぐらいから、下りて来て、涙を流して、顔色も失せて、「この身が無事であればこそ、院にもお仕えできるのです。気力も心も失せて、真偽を見極めることなどできそうもありません」と言うやいなや、がたがたと震えた。白河院は、(そのことを) お聞きになって、お笑いになって、これといった処罰も行われず、そのままになったということである。

あの韋仲将が、凌雲台に上った時の気持ちも、このようだったのだろうかと思われる。

当時の人々は、(仏師のいきさつを) どうしようもないろくでなしの話だと言っていたのだが、顕隆卿が(それを) 聞いて、「こいつは必ず神仏の御加護があるべき者だ。誰かが処罰されそうだということを知って、自分から、愚か者のふりをしたのは、みごとな気の回し方だ」とおほめになったということだ。

その言葉通りに(この者は) 長く院にお仕えして、つつがなかったという。

問二 (ア) 1 (イ) 2 (ウ) 3 (エ) 2

【古文の通釈】

陸奥国田村の里の住人、馬の允の誰それとかいう男が、鷹狩りをしていたが、鳥を捕らえられずに手ぶらで帰ったところ、赤沼という所に、おしどりの夫婦がいたのを、くるりの矢を使って射たら、狙いどおり雄鳥に当たった。そのおしどりをすぐにそこで鷹に与えて、餌の食べ残しを餌袋に入れて家に帰った。その次の夜の夢に、たいそう上品な女でいかにも小さい人が、枕元に来てしくしくと泣いていた。不思議に思って、「どのような理由のある人がこんなにも泣くのだ」と尋ねると、「昨日赤沼で、これというほどのあやまちもございませんのに、長年の間の(一緒にいた) 夫を殺しなされた悲しみに耐えられずに、参上して訴え申し上げるのです。この思いによって私も生き長らえますことはできないでしょう」と言って、一首の歌を詠んで、泣きながら去っていった。

日が暮れると(夫を) 誘って(二人で寝て) いたのに(今は) 赤沼の真菰に隠れて一人で寝るのはつらいことだし、しみじみとして不思議に思っていると、中一日置いて、餌の食べ残しを見ると、餌袋におしどりの雌鳥が、(雄鳥の) くちばしを自分のくちばしに重ね合わせて、死んでいたのだった。これを見て、その馬の允は、すぐに髪を切って出家したのだった。